



Title	地域・職種別にみた左室形態の比較：10年間の血圧推移よりみた検討
Author(s)	中西, 範幸
Citation	大阪大学, 1986, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/34951
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・（本籍）	なか 中	にし 西	のり 範	ゆき 幸
学 位 の 種 類	医	学	博	士
学 位 記 番 号	第	7 1 4 6	号	
学位授与の日付	昭 和 61 年 3 月 18 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学 位 論 文 題 目	地域・職種別にみた左室形態の比較 —10年間の血圧推移よりみた検討—			
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 朝倉新太郎			
	(副査) 教 授 後藤 稠 教 授 鎌田 武信			

論 文 内 容 の 要 旨

（目 的）

秋田，大阪を中心とする循環器疾患の疫学調査を通じて，食塩の過剰摂取，動物性食品の摂取不足とともに，肉体労働の過重が高血圧の進展を速め，脳卒中の多発をもたらす要因となっていることを指摘してきた。しかし，日常的な肉体労働が，高血圧と関連して，左室形態にどのような影響を及ぼすかについては，未だ十分に検討されていない。

そこで，本研究では，生活環境が異なる秋田，大阪の循環器疾患の疫学調査に超音波心臓検査を導入し，日常的な身体活動と高血圧の進展が左室形態に及ぼす影響を，地域・職種別に検討した。

（方法ならびに成績）

経年的に循環器疾患の疫学調査を実施している 3 集団（秋田農民，大阪現業職，大阪事務職）に属する男子で，少なくとも過去 10 年間の血圧推移が把握されている受診者 701 名（40～59 歳）を対象に，超音波心臓検査を実施した。日常的な身体活動の影響は，比較した 3 集団の中では，秋田農民が最も強く，続いて大阪現業職，大阪事務職の順に弱くなると考えられる。過去 10 年間の検診記録をもとに，対象を 7 群の血圧推移区分（Ⅰ：正常血圧→正常血圧，Ⅱ：正常血圧→境界域高血圧，Ⅲ：境界域高血圧→境界域高血圧，Ⅳ：正常血圧→高血圧，Ⅴ：境界域高血圧→高血圧，Ⅵ：高血圧→高血圧，Ⅶ：高血圧→高血圧＋心電図 ST・T 異常）に分け，各血圧推移区分間，各集団間の左室形態を比較した。

得られた成績は以下の通りである。

- (1) 高血圧の進展に伴う左室形態の変化：各集団の心室中隔厚，左室後壁厚の平均値は，いずれも，Ⅰ群が最も小さく，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ，Ⅶ群の順に大きい値を示した。拡張末期左室内径の平均値は，

大阪の2集団では、各血圧推移区分を通じて、明らかな差を示さなかった。秋田農民でも、Ⅰ～Ⅴ群の間では、明らかな差を認めなかったが、Ⅵ、Ⅶ群ではⅠ群に比べて明らかに小さい値を示した。各集団とも、左室壁厚／左室内径の比は、Ⅰ群よりⅦ群へと順次大きくなり、左室は求心性肥大を示した。とくに、秋田農民のⅥ、Ⅶ群では、求心性肥大の程度が大きかった。そして、そのほとんどは対称性肥大であり、非対称性肥大（心室中隔厚／左室後壁厚 ≥ 1.3 ）は、Ⅶ群（3集団合計）の4.3%にみられたにすぎなかった。

(2) 各集団における左室形態の比較：拡張末期左室内径、心室中隔厚、左室後壁厚の平均値は、いずれも、各血圧群において、日常的な身体活動の影響が強い秋田農民で最も大きく、大阪現業職、大阪事務職と、身体活動の影響が弱い集団ほど小さくなることを認めた。この左室形態の集団間の差は、Ⅰ群で著明で、Ⅱ群からⅦ群へと、高血圧が進展したと考えられる群ほど、次第に縮まる傾向を認めた。しかし、高血圧が進展した群でも、秋田農民の左室壁厚は、大阪の2集団より大きかった。

（総括）

以上、高血圧の進展、および日常的な身体活動が左室形態に及ぼす影響について検討し、以下のことを明らかにした。

1. 生活環境を異にするいずれの集団においても、高血圧の進展に伴い、心室中隔、左室後壁は、いずれも次第に肥厚する。一方、左室内径は、高血圧が進展しても、正常血圧のそれとほとんど変わらないか、むしろ狭小化の傾向を示すため、左室は求心性肥大を示す。
2. 各集団の正常血圧群の比較で、左室内径、左室壁厚の平均値は、日常的な身体活動の影響が強い集団ほど大きい。これは、日常的な身体活動が左室形態に影響を及ぼすことを示している。しかも、日常的な身体活動の影響が強い集団では、小さい集団に比べて、高血圧の進展に伴い、左室壁の肥厚、求心性肥大が強く出現している。このことは、日常的な身体活動の過重が、高血圧の予後に悪影響を及ぼす可能性を示唆している。

論文の審査結果の要旨

本論文は、長年の調査を通じて生活環境の実態が明らかとなっている3集団（秋田住民、大阪の現業系および事務系勤務者）の循環器疾患疫学調査に超音波心臓検査を導入し、高血圧および日常的な肉体労働の軽重が、左室形態に及ぼす影響を検討したものである。そして、高血圧の既往のない正常血圧者においても、日常の肉体労働の影響の強い集団では軽い集団に比べて左室壁厚、左室内径が大きいことを明らかにした。また、高血圧の進展に伴い、肉体労働の影響の強い集団では、左室壁の肥厚がより著明となり、高血圧の予後に悪影響を及ぼす可能性を示した。

本論文は、高血圧が心臓に及ぼす影響を解明する上に、また高血圧者の管理・指導を進める上に重要な資料を提供するものであり、学位論文に値すると判断した。